

平成30年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 京都府 】

学校名【京都府立与謝の海支援学校】

1 実践テーマ	【 III・V 】
2 実施対象者	<ul style="list-style-type: none"> ・京都府立加悦谷高等学校 ・京都府立与謝の海支援学校小学部教員
3 展開の形式	<p>(1) 学校における活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 教科名 () ② 行事名 (京都府立加悦谷高等学校との合同陸上練習) ③ その他 (教員向けのボッチャ大会) <p>(2) 地域における活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	<p>(1) 陸上競技の練習を通して、双方の交流を図るとともに、本校生徒の競技力と意欲を高める。</p> <p>(2) 障害者スポーツの普及を図る。</p>
5 取組内容	<p>(1) 時期・期間を設定して京都府立加悦谷高等学校陸上競技部と陸上競技の合同練習をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 陸上部の普段の練習内容を合同で取り組むことで、陸上競技に必要な基本的な身体の動かし方を習得する。 ② 専門的なトレーニング方法を学ぶ。 <p>(2) ボッチャを機会あるごとに実施する。 小学部の指導者にボッチャを経験してもらい、日頃の指導に活かしてもらう。</p>
6 主な成果	<p>【京都府立加悦谷高等学校との合同陸上練習】</p> <p>合同練習会では、普段とは違った環境や用具、練習内容を体験することで、本校での練習に取り組む姿や意識が向上した。また、合同練習に参加した生徒が、参加できなかった生徒に学んだことを伝える姿もみられ、生徒同士の学び合いと教え合いにつながった。</p> <p>練習会では、京都府立加悦谷高等学校陸上競技部員が主体となり、本校生徒に直接指導をしながら、お互いを知ろうと接し方などの工夫をすることで、本校生徒の実態や障害への理解も進んだと考えられる。本校生徒にとっても、同年代の友だちからのアドバイスはスムーズに受け入れることができ、質問もしやすいようであった。また、身体の使い方にぎこちなさがあった生徒も、同年代の友だちとの関わりの中でリラックスしながら練習に取り組み、基本的な身体の動かし方の向上がみられたことは成果であった。</p>

7実践において工夫した点 (事業の特色)	<p>生徒同士の教え合い、学び合いに重点を置き、練習中はなるべく教員が間に入らず交流を行った。</p> <p>練習の様子を動画で撮影し、練習メニューの振り返りやフォームの確認ができるようにした。</p> <p>【ボッチャ大会】</p> <p>指導者のみでボッチャのトーナメント戦を行い、ボッチャのルールや面白さを体験してもらい、日頃の遊びの指導や体育の授業の指導に活かしてもらえるようにした。</p>
8主な課題等	<p>【京都府立加悦谷高等学校との合同陸上練習】</p> <p>交流校との予定の兼ね合いもあり、陸上大会を見据えた種目別専門練習を実施することができなかった。来年度は年度初めから交流校と連絡を取り合い、種目別の専門練習も取り入れながら更なる技術の習得をねらいたい。</p> <p>【ボッチャ大会】</p> <p>ボッチャをより広めるための取組を引き続き行っていけるような計画と、その取組を運営していけるような体制作りが必要である。</p>
9来年度以降の実施予定	<p>加悦谷高等学校陸上部の大会・練習日程との兼ね合いもあるため、具体的な日程については未定だが、今年度と同様か、もしくは練習回数を増やして実施したい。</p>



No. 2379



教育ルネサンス

五輪・パラリンピック教育 3

新聞@スクール

支援学校生と学びあおう



①陸上の合同練習をする生徒(へい日、京都府立加悦谷高校で) ②ポッチャの補助具を製作する生徒(田無工業高提供)

今日1日、京都府北部の与謝野町にある府立加悦谷高校のグラウンド。炎天下、約20人の陸上部員は、近くの府立与謝の海支援学校中部部、高等部の生徒6人と陸上の合同練習をしていた。

参加した支援学校の生徒には知的障害がある。2時間わたって一人ひとりにトレーニング方法を丁寧に伝えた。股関節の周りの筋肉を鍛える

時、大きく足を広げられない生徒には駆け寄り、「大丈夫?」「足を前に出して」などと声をかけた。

国は2015年度から、五輪・パラリンピック教育の推進校を設け、今年度は773校にまで広げる予定だ。両校はともに15年度から推進校に選ばれ、障害への理解を深めようと、毎年3、4回、陸上の合同練習を続けてきた。支援学校で総括主事を務める高橋佳美教諭(56)は「いつもすべに諦める子が、合同練習で加悦谷高の部員に励まされると、最後まで頑張れる」と話す。

部員にとっても、障害のある同世代の生徒と、共に時間を過ごす貴重な機会になる。今年4日には、東京都教委が、ボールを投げたり転がしたりして目標への近さを競う競技「ポッチャ」の大会を開いた。都内の小中高校、特別支援学校の計30校から約160人の児童生徒が集まり、混成チームで作戦を話し合う姿もみられた。

都内の工業高校8校は、ポッチャで球を転がす滑り台状の補助具を作り、大会運営の支援にあたった。その一つの都立田無工業高は、部活動で木工に取り組む生徒十数人が何度も近くの特別支援学校に足を運び、支援学校の生徒と相談しながら改良を重ねた。大会では、体が不自由な生徒のプレーの助けもした。岡谷典幸副校長(56)は「何度も接してきたから精神的な壁を感じさせない。障害への理解が深まるだけでなく、感謝され、頼られることが生徒の自信にもつながっている」と手応えを語った。

2年の木下瑚都さん(16)は「支援学校の手は陸上がすごく好きで、自分たちも楽しい」と笑顔を見せた。陸上部顧問の木村純樹教諭(46)は「教えるには自分がしっかりする必要がある。ふだん無口な部員も主体的に声を出す。お互いに学びあえる」と語る。